

姫路城の石垣

姫路城では三種類の保存された石垣を見ることができ、それぞれが城郭建築の違った段階に結びつけられる。

野面積（積上型石垣）

この種類の石垣は 16 世紀後半の偉大な武将である豊臣秀吉(1537-1598)の時代のものである。使われている石は主に凝灰岩・チャート・泥岩で、大きさも多岐に渡っている。ところどころ職人は古い石臼や墓石、石棺を再利用した。間詰石と呼ばれる小さな丸い石が大きな石の隙間を埋めるために使われた。

打込ハギ（クサビ型石垣）

この石垣は 17 世紀初頭に増改築を行った大名、池田輝政（1565-1613）が築いたものである。他にも、大名の本多忠政（1575～1631）が 1618 年に三の丸を修理した際に、打込ハギの壁が追加された。石の形や配置はやや粗いままであるが、石垣の隅には、より正確に削られた石が交互に積み重なったレンガ状の「算木積」と呼ばれる形で補強されている。先代の野面積と同様に、打込ハギの石垣には、石の間に隙間があり、小さな間詰石が詰められていた。主に使用されている石は凝灰岩で、一部は淡い黄色で、残りは濃いグレーや黒の色である。壁は徐々に内側に向かって凹んだ弧を描くように傾斜している。

切込ハギ（面取り型石垣）

このタイプの石垣は三の丸（三の丸）の一部で見ることができ、大名本多忠政によって築かれた。姫路城では一番新しい石垣である。石工はのみで同じようなサイズ・正確な形に整形し、隙間なく積み重ねている。高さのほぼ全体が内向きに傾斜している打込ハギと異なり、この石垣の上 3 分の 1 は完全に垂直になっていることが多い。